

古志青年部年間作品集
第三号

目次

露の玉						
野遊び						
肌						
一日一句						
筑波山						
さくらんぼ						
■自選十二句						
イーブン美奈子						
石塚直子						
泉 経武						
市川きつね						
岡崎陽市						
金澤諒和						
16	14	12	10	8	6	5

■青年部入会案内

〈文章〉

■講評

飛岡光枝

40

■評論

渡辺竜樹

50

■青年部合宿句会報告

高平玲子

56

■青年部年間活動記録

60

俳句作品

さくらんぼ

イーブン美奈子

花衣面と向つて母娘
恋しさを募らせてゐる朧かな
年下の君も子を抱くさくらんぼ
樹の下は恋人たちの五月かな
濃き白といふ白のあり雲の峰

蹴り上げて夏足袋の白輝かす

松茸のけふ山下りて来しといふ

秋晴の北京へ続くハイウェイ

茶葉沈みゆくを待ちけり秋の夜

どこまでも青空続く小鳥狩

林檎の香包みて君に届けんと

水仙をばさつと切つて決断す

■一九七六年生まれ。神奈川県出身、タイ国バンコク在住。ホームページ部部員。海外日系人協会の第四回みなとみらい文芸祭にて海外日系人協会理事長賞、第八回、第九回同文芸祭にて文芸祭受賞。

筑波山

石塚直子

阿と言へば咩と言ひ合ひ鰻食ふ
夏足袋を解きて我が身に戻る足
披講して暑さのことは忘れけり
秋雲に飛行機雲が溶け出しぬ
倒れたる墓にこぼるる実南天

古酒入れて煮めの味を深うせん
枯尾花筑波の山をくすぐりぬ
椀もまた嫁入り道具納豆汁
冬麗や誰もが誰かの母であり
雨降れば蛙の生るるにほひする
輪廻してふたたたび流す雛かな
桜餅食つて桜の木にならん

■一九八七年生まれ。茨城県出身、
在住。古志青年部部長兼校正部部
員。

一日一句

泉
経武

春雨やかいておぼゆる古語もあり

洗ふたび型崩れゆく夏帽子

なるやうに風そのものに夏の蝶

魚でも鳥でもなくて鮎として

遠慮して風鈴こする風来たる

欄干に倚せたる細身遠花火

白き首さきに突つ込む夕立傘

破団扇疊につく手齢あり

白雲に居を与へたる秋の川

存分に昔に戻り村祭り

秋の声形なきゆへぬすまれぬ

紅葉すアンパンマンの炉の煙り

■一九六五年生まれ。東京都出身、在住。

肌

口笛に羊集まる春野かな
手作りの橋があちこち水温む
近づけるほどに散りゆく桜かな
まむし酒髭を濡らして飲みにけり
明易や花瓶の水をぶちまけて

市川きつね

王冠のごとき帯ある苳かな
天の川煙草を吸つてすぐ戻る
木を植ゑてそれが墓標や詣でけり
秋の風山肌に家びつしりと
全財産のごとくに抱いて火鉢かな
絨毯を人も蜜柑もごろごろと
ふるさとの大根抜きに駆けつけん

■一九八七年、新潟県生まれ。ヨ
ルダン・ハーシミーヤ王国在住。

野遊び

岡崎陽市

野遊びの子らに翼のあるごとし
春日野はいにしへの原蝶々舞ふ
凧一つはためきながら揚がりけり
さざ波を立ててはいそぐ田植かな
さみどりは喜びのいろ豆ごはん

しんしんと時すすみをり蟻の列
噴水やまだ見ぬひとを待つ心
ひらくたび富士あらはるる扇かな
嶺越えてゆく秋雲となりにけり
一椀の手にずつしりと芋煮かな
踏み抜いてひとりおどろく初氷
おもひでの宿にこよひも雪が舞ふ

■一九七二年生まれ。愛媛県出身、
在住。古志同人。二〇一〇年古志
新人賞受賞

露の玉

金澤諒和

青嵐 吾一瞬にして老いぬ

梅雨冷や祖父の香りの経開く

くろがねの水を蹴りをり水馬

息さへも音になりたる蛍の夜

かつて子のゐて妻のゐて露の玉

美しき空の来てゐる芋煮会
短日や名字の違ふ吾子と逢ふ
吊革に無数の拳春来る
種袋振つて未来の音を聴く
鉛筆を握つて寝る子春の月
遠足の女教師駆くる芝生かな
ことごとく濡れてゐるなり燕の子

■一九七一年生まれ。神奈川県出身、大分県在住。足利文芸賞入選。

鼈

関根千方

白梅や経をつぶやく虻もゐて
脚たたむ仔馬のかたち馬の胎
菩提樹の蔭涼しくもあたたかな
うろうろと熟れたる枇杷を偷盗す
太陽と月と引き合ふ西瓜かな

秋の日をのびてはちぢみ子子よ

一杯の鱈を以て冬至粥

熱爛や狼ならば心にゐ

顔出して土筆の五百羅漢かな

信心の蝌蚪曼荼羅となりけり

はんぎぎの息つぐときも眠りをり

三山の御片かげを帰りけり

■一九七〇年生まれ。東京都出身、在住。古志同人。古志東京支部長兼ホームページ部部长。二〇二〇年古志新人賞受賞。

初戎

高角みつこ

おもちゃでも小判うれしや初戎

お玉持つ祖母のなつかし三つ葉粥

割烹着似合ふ私や草の餅

恋猫をとんと見かけぬ街となり

祀らるる張り子の蝦蟇の暑さかな

白玉や独身時代遠くなり

大蜘蛛の動くと見えて風ばかり

秋晴や子猿の芸はおじぎから

だるまさん転んだの声木の实落つ

秋雲や今もバナナの歌が好き

初暦うねり大きくぶら下がり

雪しんしんおがこに眠る山の芋

■一九七三年生まれ。兵庫県出身、
大阪府在住。古志同人。古志校正
部部員。

湯婆

高平玲子

山笑ふぼちぼち熊を起こさうか
潮干狩縄文人の腰つきで
隕石や蟻一匹に命中す
朝市を仕舞ふ頃合蟬時雨
夕焼を消しに西へと烏かな

生け贄の子羊の目の涼しかり
億年を泳ぎ疲れて海月かな
爽やかや川は万物流し去る
また板に刻む命やぼたん雪
プラトンの生れ変りか寒鴉
人疲れせし一日なり湯婆抱く
千年はあつという間よ冬桜

■一九六九年生まれ。東京都出身、
静岡県在住。

楽土の果実

竹下米花

様式の美と効率と扇風機

夏の月来世彼処で珈琲屋

青北風や不安は万年筆で書け

梨剥くや楽土の果実それぞれに

翹雲おもひ出す旅それも旅

百年前 千年前 も 落葉 搔
友の 来て 立春 大吉 京の 旅
干菓子 より 草餅 所望 御新造
単車の る 吾も 五月の 風となり
ほととぎす 聞きつ 薄めの 文庫本
田の水の 吹き寄せられし 処湧く
新月の 珈琲店の さざめごと

■一九七四年生まれ。神奈川県出身、
京都府在住。

甘酒

丹野麻衣子

膝の皿割つたることを初笑
仕事無事終へて四日の灯にまみれ
はじめての余寒に金魚尾をふれり
まろび出てあらたのしきの鳥の恋
塗り上げて千枚のまづ一の畦

飛び梅の青き実をいざ天日干し
行々子恋も喧嘩も葭の中
青丹よし奈良の都ぞみちをしへ
宗祇水ひやしかためて水羊羹
甘酒やしまひにすする米のつぶ
萩刈つて落葉は掃いてもてなさん
後ろから木の葉が来たり風も来る

■一九七四年生まれ。石川県出身、
神奈川県に育つ。東京都在住。古
志自選同人。古志同人会副会長。古
二〇〇八年第三回飴山賞受賞。

夏蝶

おしるしと言ひてたつぷり年酒受く

蒨の臺芽吹いた日から春とせん

赤々と落つるしづくや山椿

釣釜のゆうらゆうらと春来る

夏蝶になりて気ままな旅をせん

辻
奈央子

夕焼が焦がせしごとく牡丹かな
この骨身振舞水に生かされて
鳥居の朱掠れんほどの炎暑かな
みちのくを照らせ紅葉で秋の日で
お地藏の息の白さも見えさうな
綿虫のただなかをいざ待庵へ
炉を囲む中に利休もおはしけん

■一九七七年生まれ。神奈川県横浜
浜市出身、在住。古志編集長。

平家鼯貞

西村麒麟

鶴来ると光る小さな鏡かな
読み干すと言ふ事ありて冬籠
猪を追つ払ふ棒ありにけり
小さくて白磁の馬や春を待つ
流されて壺焼きを食ふ暮らしかな

清盛が釣りに行つたり桜鯛
ゆく春や今年も平家鼯鼠にて
陶枕の青くて遠き山河かな
若竹の北鎌倉も雨ならん
端居して幽霊飴をまたもらふ
夕涼の頃には帰れ金平糖
鯖寿司のためにやうやう起きて来し

■一九八三年、大阪市生まれ。神奈川県在住。第一回石田波郷俳句新人賞受。

菖蒲

藤原智子

人 参 を 花 の か た ち に 明 の 春
鬼 た ち も ぬ か る み の 中 鬼 や ら ひ
ダ ダ ダ と ミ シ ン を 踏 む 日 山 笑 ふ
が う が う と 花 を ゆ ら し て 嵐 く る
寝 返 り の 途 中 で 泣 く か 草 の 餅

菖蒲の湯一人を入れてまた一人
人知れず簾の落つる暑さかな
朝顔の種はじけんとこぼれんと
名月やうちに帰ると泣く子供
枯蔓のはじけるままに引きにけり
髪切つて髪薄々と小六月
山茶花や影踏み次はかくれんぼ

■一九七六年生まれ。大阪府出身、
埼玉県在住。古志「つくし」欄選
者。二〇一〇年第四回三十句競詠
賞受賞。

未満

森
篤史

変はらないものがふるさと鳥渡る
風全て我が身に向かふ枯野かな
ドアマンの無表情なる息白し
冬の雨電気で動くものの硬き
読初に人の死なないミステリー

川を結ふ紐の如くに流し雛
卒業式謝る予定ひとつあり
初花や下の名前を呼び慣れず
友達以上恋人未満さくらんぼ
網戸してズボンは部屋の隅で脱ぐ
顔中に色浴びてをり揚火花
爽やかに一つの恋を終はらせる

■一九九〇年生まれ。埼玉県出身、在住。

蘆刈

渡辺竜樹

桃山の陶片を埋め春の山

浮きあがる亀の甲羅や春惜しむ

焼栄螺吹きこぼれては火を打てる

鼠志野すなはち花の曇りかな

禍禍しき花毒毒しき花山開き

虫干しのごとく法話を聴く我ら

ゴーヤ棚汗噴くゴーヤぶらさがる

日焼して大難題にむかふべく

なにごげなく秋の団扇を手にとられ
あるときの師は、

鎌音の一人うごくや蘆の中

木の実降る秋とも知らず光堂

茸焼くこの一日は遊ぶため

■一九七六年生まれ。愛知県出身、在住。古志名古屋支部長。二〇一〇年第五回飴山實俳句賞受賞。二〇一二年第五十八回角川俳句賞予選通過。

入会案内

- 「古志」の年会費は一万二〇〇〇円です。
- 二十五歳未満（その年の一月一日現在）の場合、年会費は三〇〇〇円です。
- 会費の納入は郵便振替で振り込んでください。
- 振込み人欄に、氏名・併号（ふりがな）、生年・月、男女、郵便番号、住所、電話番号を明記ください。
- 郵便振替口座の番号は、次の通りです。
古志社 0010007512480
- 古志青年部に参加できるのは五十歳未満の古志会員です。
- 古志青年部ブログのURLは、
http://blog.livedoor.jp/koshi_seinembu/ だよ。

文章

講評

『古志青年部年間作品集』を読む

飛岡光枝

濃き白といふ白のあり雲の峰

イーブン美奈子

松茸のけふ山下りて来しといふ

どこまでも青空続く小鳥狩

「雲の峰」のボリュウム感を「濃き白」と表現した一句目、「山下りて来し」という擬人化により「松茸」の存在感を示した二句目。どちらの句も、捉えたものをしつかり伝えることができる作者の力量を感じさせる。三句目は、「小鳥」でなく「小鳥狩」という季語ゆえに「どこまでも青空続く」がただの秋の空の説明で終わらず、ある種の不安感を感じさせ、奥行きのある句となった。

秋雲に飛行機雲が溶け出しぬ

石塚直子

雨降れば蛙の生るるにほひする

桜餅食つて桜の木にならん

一見普通に読める句が並ぶが、どれも鋭い感覚が成した句。自分の感覚を信じてしつかり句を作つていくというのは、言うのはたやすいが、なかなか難しいこと。「古酒入れて煮メの味を深うせん」「椀もまた嫁入り道具納豆汁」のような古風な作品を作っていることもこの作者の場合には力になっているのではないだろうか。

春雨やかいておぼゆる古語もあり

泉 経武

洗ふたび型崩れゆく夏帽子

存分に昔に戻り村祭

「夏帽子」の句は、型崩れするのは帽子ばかりではなく、「夏」そのものが崩れてゆくような不思議な感覚を読み手に与える印象深い一句。「春雨」の句は、さらさらと書く古語が春雨に見えてくる。この作者は「なるように風そのものに夏の蝶」の句にみえるように、言葉や表現と格闘している真つ最中のようだ。「遠花火」「破団扇」の句は思いが先走り、季語が付き過ぎになっているのが惜しい。

口笛に羊集まる春野かな

市川きつね

まむし酒髭を濡らして飲みにけり
全財産のごとくに抱いて火鉢かな

句集は一句目が大切。十二句並んだこの作品集も同じだろう。この作者の一句目は、「春野」の句というだけでなく、春が来た喜びまでもが詠み込まれており一読幸福感に包まれる。また、『肌』というタイトル通り、身体を感じさせる句に読み応えがあった。

風一つはためきながら揚がりけり

岡崎陽市

さざ波を立ててはいそぐ田植かな

ひらくたび富士あらはるる扇かな

踏み抜いてひとりおどろく初氷

どの句も確かな手触りを感じさせる。そして特に感心したのは、平仮名と漢字の使い方。一句のなかでのそれぞれの言葉の位置に細心の注意を払いながら、形はあくまで平明。すつと入ってくる。

青嵐吾一瞬にして老いぬ

金澤諒和

くろがねの水を蹴りをり水馬

ことごとく濡れてゐるなり燕の子

作品全体に、ある緊張感が漂う。それはどの句も、直接間接を問わず生と死を詠んでいるからだろう。それが観念的にならず、読み手に伝わるのは季語をきちんと選んでいるからに他ならない。「青嵐」と「一瞬」、「くろがねの水」と「水馬の脚」の呼応、生まれたての燕の子の生々しき。

白梅や経をつぶやく虻もゐて

関根千方

太陽と月が引き合ふ西瓜かな

はんざきの息つぐときも眠りをり

白梅に飛んで来た虻の「ぶくん」という羽音を経と聞いた。虻の羽音を経と聞きなしたところ、そして、それを「つぶやく」と言ったところが愉快。虻はもちろんいろいろな花にやってくるが、この句は「白梅」ならでは。二句目の「西瓜」は、地球ということか。なるほど「西瓜」のみずみずしさはまさに地球。「はんざき」は「山椒魚」の別称。何十分に一回、ゆらりと水面に浮いて息を継ぐ。おかしみと哀しきの漂う一句。

祀らるる張り子の蝦蟇の暑さかな

高角みつこ

大蜘蛛の動くと見えて風ばかり
雪しんしんおがこに眠る山の芋

取り上げた三句は、どれも大らかでいて気持ちが行き届いた句。特に二句、三句がいい。しかし、今回の作品のなかには、「割烹着似合ふ私や草の餅」など、大らかさゆえに焦点が結びにくくなってしまう句もある。また「おもちゃでも小判うれしや初戎」は、全て言ってしまったのが残念。

山笑ふぼちぼち熊を起こさうか

高平玲子

潮干狩縄文人の腰つきで

隕石や蟻一匹に命中す

億年を泳ぎ疲れて海月かな

独特の視点と思い切りの良さを感じさせる作品が多い。一句目の「ぼちぼち熊を起こさうか」、二句目の「縄文人の腰つきで」はまさに古人の視点。蟻に命中する隕石、何億年も泳ぎ続けている海月と、時空を越えた思いを表現した意欲作がおもしろい。

夏の月来世彼処で珈琲屋

竹下米花

単車のる吾も五月の風となり

ほととぎす聞きつ薄めの文庫本

この世でなくて来世で珈琲屋になるという思いの真意はよくわからないが、その危うさと「夏の月」がよく合っている。旅を感じさせる三句目は、「ほととぎす」の句として新鮮。「聞きつ」は「聞きつつ」か。二句目の「単車」の句はよくある内容だがしつかり詠んでいて好感が持てる。この作者の作品は、形にはなっているが平明すぎてただ事になってしまっている句と、思いが先走り、残念ながら伝わるまで表現できていない句が入り交じっている。しつかり詠めている句がたくさんあるので、つぎは客観的に作品を見る目を養っていくことだ。それはもちろん、この作者にかぎったことではない。

膝の皿割つたることを初笑

丹野麻衣子

まろび出てあらたのしぎの鳥の恋

宗祇水ひやかたためて水羊羹

甘酒やしまひにすする米のつぶ

この作者の作品は、何と言ってもリズムがいい。特にこの作品集のように何句も並ぶとそれが際

立つ。「初笑」の句はまさに俳諧。「まろび出て」は、二羽の小鳥が目の前でちゅんちゅんといっているのが見えるよう。「米のつぶ」の句は質感と心持ちがいい。

露の蘘芽吹いた日から春とせん

辻 奈央子

赤々と落つるしづくや山椿

お地藏の息の白さも見えさうな

たつぷりとした句柄のなかに、鋭い視点を感じさせる句が多い。揚げた三句は特に自然と一体となったような安心感が漂う。「露の臺」の句は、春の女神のつぶやきのような一句。三句目、ほんとうに白い息が見えるような句。

読み干すと言ふ事ありて冬籠

西村麒麟

猪を追つ払ふ棒ありにけり

若竹の北鎌倉も雨ならん

読書三昧という冬籠の醍醐味を「読み干す」と表現。作者のある決意までもが思われる。二句目は、棒などで猪を追ひ払えるのだろうかと思うが、棒を傍らにしている人の風貌までも思われて、おか

しい。「若竹」の句は雨に濡れる緑に目が洗われるよう。「北鎌倉」も効いている。

人參を花のかたちに明の春

藤原智子

ダダダダとミシンを踏む日山笑ふ

菖蒲の湯一人を入れてまた一人

人知れず簾の落つる暑さかな

平明だが、芯にある強さを感じさせる句柄。揚げた句はどれも物に託して思いを詠む、俳句の王道をいって成功している。はじめの三句はしっかりと生活感を伴った句で、はじめせず、いきいきとしている。「簾」の句は人知れずに落ちる簾に暑さを感じた鋭い視点の一句。

風全て我が身に向かふ枯野かな

森 篤史

ドアマンの無表情なる息白し

読初に人の死なないミステリー

卒業式謝る予定ひとつあり

この作者の作品の良さは、作者の存在が感じられるところだ。俳句においてそれは、マイナスになることが多いが、一連の作品は季語の選択の良さ、的確な切れで読ませる。一句目は寒風に吹かれている自分をこれでもかと表現して句になった。二句目は、無表情なドアマンに白い息が際立つ。

鼠志野すなはち花の曇りかな

渡辺竜樹

ゴーヤ棚汗噴くゴーヤぶらさがる

木の実降る秋とも知らず光堂

「鼠志野」を「花曇り」と捉えた。「すなはち」が説明的なのが惜しい。ゴーヤの句は、ゴーヤの存在感が圧倒的。こういうしつかりした句に作者の力量が伺える。三句目は、「光堂」の歴史や佇まいまでも呑み込んだ、深々とした一句となった。

俳句は「座の文芸」と言われる。それは連歌から連句、俳諧、俳句という歴史を踏まえてのことであり、現在でも「結社」「句会」など、ある「座」を基本にした文芸であることは事実だ。こういう頭でつかちなことでなく、私が「座」ということを心から納得したのが「古志青年部」の句座

であった。長谷川權前主宰のもと、大谷主宰はじめ、今の青年部の人々も多く在籍していた。私は古志の執行部員という役得で参加していたその句会は、前主宰の指導が厳しいということもあつたが、参加者全員の目の色が違う句会であつた。参加者全員がある気概を持つて参加していた。懸命に句を作り投句して選句した。前日から神経がぴりぴりして鎮めるのに苦労したのを憶えている。「座」とは、その場がただあればいいということではない。「古志青年部」の句会は、参加者全員がその「場」を作るのだと知つた、数少ない句会だつた。今回、青年部の作品を読み、その場が健在なのを心強く思つた。

評論

宇佐美魚目俳話録抄

渡辺竜樹

東海道を世阿弥が歩いている夢を見ました。

あるとき、先生はそう語った。

——なんかこの世の中は不思議なことが起こるんですねえ。

魚目先生は夢の輪郭を追うような顔をする。

それは、世阿弥が冬の東海道を餅花売りをしながら歩いているというもので、先生の鳴海の家の近くを通る旧東海道を、ゆえ知らぬ悲しみを背負つてとぼとぼと歩く青年世阿弥が思い浮かべられ、時代は錯誤ながら、どこか胸に迫るものがあつた。

魚目先生は、夢を媒介にしながら見えないものを見ようとする。ここでの世阿弥は、歴史上の世阿弥ではなく、手をのばせば体温が伝わってくるような世阿弥である。すぐそこにいる者としての「世阿弥さん」である。

古人がいまここにいるように感じることは世阿弥にかぎらない。

魚目先生は下里寂照宛貞享三年十月二十九日付の芭蕉書簡（真跡）をもっていたことがある。この貴重な筆跡との極私的で密やかな和合によって、松尾芭蕉は「芭蕉さん」となり、両者のあいだには時を超えた交流が生まれた。芭蕉への思い入れは芭蕉と関係の深い鳴海・下郷家（芭蕉の時代は下里家）当主と親しくしていたことに由来するのであろう。この辺は中村雅樹氏の名著『俳人宇佐美魚目』（本阿弥書店、二〇〇八）に詳しい。

魚目先生は電話を好まない。訪問の意志を伝える場合、電話ではなく手紙での照会を求められる。約束の時間に何うと大抵、玄関を出て到着を待つていてくださる。笑顔で迎え入れられて取り付きの階段（黒光りしている！）を上がったところ、そこはまさに魚目的世界。書道教室の名残を伝える細長い机の上には書物、たくさんの書画、文房四宝。「一、深くこの生を愛すべし 一、省て己を知るべし 一、学芸を以て性を養ふべし 一、日々新面目あるべし」と会津八一が示した学規を実践しているような、芸術を心ゆくまで享受する生活ぶりだ。

——おお、ええなあ。

と掛軸の前に対座して感嘆の声をあげてから、うれしそうな表情で書の来歴について語ってくださる。贅沢な時間である。魚目先生は書画を面前にして心を傾ける。まるで書き手本人がそこにい

るかのように、書の中から声を聴き取ろうと半ば放心といった感じである。

〔即刻の消息一つ雪の柴〕（『天地存問』）という句がある。ここに登場する消息はおそらく魚目先生がお持ちの古田織部のものであろう。

即刻とは、すぐさま、という意味だ。時に臨んですかさず筆をとった即刻の書にこそ、強く人間があらわれてくるのである。そういうところを先生は愛する。

魚目先生は人間が大好きである。「あの人はおもしろい人だなあ」という言葉とともに、これまでに出会った傑物の味わいをいきいきと語ってください。人間のおもしろさが俳句のそれよりも勝っているようだ。

魚目先生は野見山朱鳥に紹介されて画家の坂本繁二郎のアトリエを訪れたことがある。名画の生まれる場所はどんなところかと期待して二階に上がると、廊下の突き当りにイーゼルが置かれてあり、そこが画家のアトリエであったという。意外であった。その折、どうして馬の絵を描くのかと画家に訊ねると、「やっぱり好きなんですようね」という答えが返ってきたという。

僕等はいつも知らず識らず愛情によつて相手をはつきり掴んでいるのだ。成る程、僕等は相手を冷静に観察はするが、相手にほんとうに魅力ある人間の姿を読む為には、観察だけでは足りない。愛情とか友情とか尊敬とかが要るので、そういうものが観察した人間の姿を明らかに浮びあがらせ

る言わば仕上げの役目をする（小林秀雄「志賀直哉論」『小林秀雄全作品第十集』、新潮社）。

香月泰男や駒井哲郎など芸術家との親交は、まずこのような愛と尊敬から始まったのである。「やっぱり好きなんでしょうね」と言った坂本繁二郎の発言は、魚目先生の俳句観に繋がるだろう。好きになって深入りすること。書家でもある魚目先生は、書は人なり、といった鑑賞態度とともに、空海、最澄、良寛、八一などの人間に書に傾倒する。

「句もええですけど、書もええなあ」

とは、高濱虚子のことである。

虚子先生（きよしせんせい）の発音は魚目先生独特）との出会いは、父親の野生に負うところが大きい。親子で鎌倉の虚子庵にも出かけた。初対面の橋本鶏二に「魚目は一人前にしてやりたいと思つてゐます」という風に語りかけた父親である。

昭和二十四年に魚目先生は結婚した。媒酌人は高濱虚子（笑うと口ひげがニョツと飛び出したという）である。あるとき、虚子から弓削道鏡の書について尋ねられている。〈雪ごもり虚子道鏡を習ひしや〉や〈道鏡と虚子と字を書く蓮の闇〉などの句にそのあたりのエピソードがにじむ。後年、この俳句の巨人と道鏡の話をする機会があつたことを歌人である前登志夫氏に伝えると、どうしてもっと突っ込んで聞かなかつたのか、と怒られたそうである。

魚目先生の書の師であった武市秀峰（たけいちしゅうほう）は「搗きたての餅のような字を書きなさい」と教えたという。造形的なことでもあろうが、いきいきとした生命の躍動を、と論したのであろう。二〇一〇年に刊行された第七句集『松下童子』の最後には次の句が収録されている。

三河国・大鷲院 山岡鉄舟「正法」の二字あり

山門の大字ゆらゆら餅の湯気

ここには、若き日の教えを思わぬ場所で見出した喜びがある。

魚目先生は昭和二十九年に書道塾をひらいている。

八月九日 子をあつめ文字を教へはじめ、これを天職とす

八月や息殺すこと習字の子に
（『崖』）

書と呼吸が密接不可分であることを魚目先生は教えようとしたのであろう。「最澄の書に息あはせ息白し」（『天地存問』）という句も、書と呼吸を詠じたもの。あるとき私は、木曾灰沢、志摩安乗、神島など、魚目俳句の生まれる場所についてお尋ねした。

それらの場所の一つ、奥伊吹の甲津原はどういうところか、と質問すると、こんな言葉を口にされた。

——なんかここにきたことがあるなあ、という風景が広がっていて、相性のいい場というものがあるとねえ。

このなげない答えの中に、俳人・宇佐美魚目をより深く知るための鍵があるような気がする。「この道はいつか来た道」（北原白秋）のように、俳人・宇佐美魚目が夢みる世界はいつも懐かしく新しい。

報告

青年部合宿会報告（八月三日、四日）

高平玲子

三日 快晴

浜松駅近くの鰻専門店「八百徳」で鰻重、鰻茶漬
けの昼食を済ませた後、各自吟行に出掛けた。街路
樹の油蟬が騒がしい。

近況は土用鰻を食べし後

直子

富士の裾ここまでのびて蟬の穴 弘至

遠州灘には色々な表情がある。サーファーや釣り
人が波の機嫌を見てそのまま引き返す日も多い。今
日の海は上機嫌で家族連れも多い。左の二句は弁天
島の景。

参加者は大谷弘至主宰を含め七名。関東からは丹

野麻衣子さん、辻奈央子さん、青年部部长で幹事の

大西瓜ここの島民みな売子

麻衣子

石塚直子さん、関西からは高角みつこさん、中部か

日焼けして親子いよいよ瓜二つ

直子

らは渡辺竜樹さん、高平が参加。

浜松城は市街地の真ん中にある。広い庭園は市民の憩いの場である。夜は天守閣がライトアップされる。

城一つ沈めんばかり蟬時雨

弘至

真つ白な城浮かびくる夜の秋

麻衣子

城が一望できるホテルの個室で歓談しながら和洋折衷の夕食を摂った。「青年部」で申し込んだためか柔道部の合宿なみの量の多さと脂っこさだった。最年少の石塚さんは涼しい顔でべろりと完食。大谷主宰は食後に陀羅尼助を服用された。

竹下米花さんは残念ながら欠席だったが粹な差し入れがあった。季節の絵手紙だ。水彩絵の具で苦瓜、ひまわり、バナナなどが白い葉書いっぱい描かれている。「余白に俳句を書いて皆さん楽しんで

下さい。」と添書きがあった。渡辺さんが即興で一句。

描かれしバナナ一房食べごろに 竜樹

食事中和やかな雰囲気から一転し、厳かに句会が始まった。

第一句座は吟行句。

以下、主宰の特選、入選句の評と添削例を幾つか挙げる。

阿と言へば畔と言ひ合ひ鰻食ふ 直子

評 阿畔という既成の言葉をばらした構成が面白い。鰻の存在感があつてよい。

原句

座敷奥どかりと占めて鰻かな　みつこ

添削後

奥座敷どかりと占めて鰻食ふ

下五を鰻食ふとした方が実感がこもる。また、上五は奥座敷とする方が青年部の厚かましさが出てよろしい。

原句

弁天島あさがほつくる家多し　麻衣子

添削後

弁天島こもあさがほつくる家

原句だと説明の句になってしまう。あさがほつくる家とすることで焦点がはっきりし気持ちの弾みも

表現される。

第二句座は席題、雨乞。

雨乞やたちまち生れし劬斗雲　玲子
雨乞についてくるなよ晴をんな　麻衣子

午後十時頃、頭も腹もくたびれて解散。

四日 快晴

今日も吟行日和だ。早朝から渡辺さんは徒歩で蜷塚遺跡へ。

捕虫網あらがひて虫金色に　竜樹

浜松城、竜ヶ岩洞、龍潭寺など各々吟行し浜松鮫子も堪能した後午後の句会となった。

夏木立井伊家のお籠小さくて　みつこ
たらふくに餃子を食べて暑氣払ひ直子

行々子恋も喧嘩も霞の中　麻衣子
霞切や水はざんぶと遠江　弘至
夜は秋ますほの小貝手にとれば　弘至

静岡支部から村松二本さん、伊藤昭子さん、仲田寛子さんが御参加下さり第三句座まで行われた。

第一句座　吟行句

家康のここに雌伏の昼寝かな　昭子
東海に浮かぶがごとく大昼寝　竜樹
健やかに人の名忘れソーダ水　寛子

年齢も肩書きも一切関係ないのびやかな雰囲気
の古志の句会が大好きだ。青年部句会に参加できる
年齢の上限が刻々と近づいてきていて寂しい。
私は初めて参加しましたが参加経験のない若い
皆さん、あつという間に年をとり青年部合宿の参加
資格を失います。主宰の熱血指導をうけられ、かつ
学生時代のクラブ合宿のように楽しいこの合宿に是
非毎年御参加下さい。

席題　夜の秋・鹿威し・行々子
みちのくの梅雨も明けたか夜の秋二本
鹿威し月の輪熊を威しけり　二本
名の庭に大きく一つ鹿威し　麻衣子

二〇一三年 古志青年部年間活動記録

- 一月四日(金)、五日(土) 新春鍛錬句会に振り替え
勉強会
- 二月二十四日(日) 吟行句会
勉強会
- 三月三日(日) 吟行句会
- 五月二十六日(日) 勉強会
- 六月一日(土) 栃木句会へ振り替え
勉強会
- 七月二十七日(日) 勉強会
- 八月三日(土)、四日(日) 合宿句会、静岡支部との合同句会
吟行句会
- 九月一日(日) 吟行句会
- 十二月八日(日) 句会および勉強会

編集 石塚直子
DTP 稲野ホトリ
デザイン 関根千方

古志青年部年間作品集 第3号

2014年3月31日 発行
2015年11月1日 PDF版発行

発行者 古志青年部
発行所 古志社 (<http://www.koshisha.com/>)
印刷所 しまや出版

©2014 KOSHI SEINENBU